

奄美諸島の石敢當受容

——喜界島・奄美大島・徳之島を中心として——

蒋 明 超

JIANG Mingchao

非文字資料研究センター 2019 年度奨励研究採択者
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程

【要旨】鹿児島本土と沖縄本島の間にある奄美諸島は、特別な存在といえる。奄美は 15 世紀に琉球王国に支配され、1609 年に島津による琉球侵攻の結果、薩摩藩に組み込まれた。幕藩時代以後の奄美諸島は、短期の米軍占領期を除くと、鹿児島県に属し今まで続いている。鹿児島県は廃藩置県の産物であったため、薩摩藩の存続といえる。現在、鹿児島・沖縄の石敢當研究は多くあるが、単に奄美の石敢當受容を論じる論文は少ない。ほとんどの場合は、鹿児島県の一部として研究されている。

奄美の石敢當伝来について、琉球伝来論や薩摩伝来論がある。琉球伝来論の観点では、奄美地方では古い紀年の石敢當は未報告ながら、鹿児島県本土には元文 4（1739）年造立のものがあり、久米島にも雍正 11（1733）年造立の石敢當があるため、沖縄県地方から次第に北上していったという見当が有力であるように思われる。一方で、薩摩伝来論の観点では、奄美諸島の北部に石敢當が多く、沖永良部島・与論島に少ない分布状況に疑問を持ち、奄美独自の九字紋がある石敢當と合わせて、奄美における伝播時期は薩摩藩支配後であろうと指摘している。どちらが正しいかは判定できない。

本論文では、物と史料とを合わせて、奄美諸島の石敢當の伝来・受容を論じている。調査地としては、喜界島、奄美大島や徳之島を選定した。

Embracement of Ishigando (Stone Monuments) in the Amami Islands

—Focusing on Kikaijima, Amami Oshima, and Tokunoshima—

Abstract: The Amami Islands are situated in a unique location between mainland Japan's Kagoshima Prefecture and Okinawa Island. The Amami archipelago, ruled by the Ryukyu Kingdom during the 15th century, was annexed by the Satsuma clan after Ryukyu was invaded in 1609 by Satsuma's Lord Shimazu. Since the era of the Bakuhan system through to present day, the Amami Islands have remained part of Kagoshima Prefecture, except for the brief period of U.S. occupation. Created as a result of Haihanchiken, or the government policy to abolish the clans and to establish prefectures, Kagoshima Prefecture is essentially an extension of the Satsuma domain.

There are numerous studies on Ishigando, or stone monuments, located in Kagoshima and Okinawa, but papers discussing how Ishigando were embraced in Amami are sparse in number.

In most cases they are done as part of larger studies on Kagoshima's Ishigando.

Two theories exist as to the origins of Amami's Ishigando: One theory states they were brought to the islands from Ryukyu, while the other believes their origin lies in Satsuma. The generally accepted view of the Ryukyu origin theory holds that the tradition began in the Okinawa area and gradually migrated northward. This view is supported by the fact that, while no Ishigando of ancient days have been identified in Amami, mainland Kagoshima has one that was built in 1739, as does Kumeshima that dates back to 1733. On the other hand, the Satsuma origin theory focuses on the uneven distribution of Ishigando among the Amami islands, with the northern part of the archipelago having many and the southern islands, namely Okinoerabujima and Yoronjima, having few. This distribution, the theory postulates, along with the fact that Amami's Ishigando are engraved with Kuji crests unique to the island, suggests that the tradition was brought to Amami after it came under the rule of the Satsuma clan. It is impossible to determine which theory is correct.

This paper discusses the arrival and acceptance of Ishigando in the Amami Islands, namely Kikaijima, Amami Oshima, and Tokunoshima, based on physical objects and historical records.

はじめに

鹿児島本土と沖縄本島の間には、大隅諸島、トカラ列島や奄美諸島など数多くの島々がある。その島々の中では、奄美諸島は特別な存在といえる。琉球より先に、奄美は9世紀からグスク時代に入った。その遺跡が、島々に多く残っている。1466年に琉球王国の侵攻を受け、その支配下に入った。1609年にまた薩摩藩の侵攻を受け、薩摩藩に実質的に支配されていた。薩摩藩時代以降の奄美諸島は、短期の米軍占領期を除くと、ずっと鹿児島県に属し今まで続いた。鹿児島県は廃藩置県の産物であったため、薩摩藩の存続といえる。奄美は独自の歴史があったものの、琉球王国や薩摩に支配されていた歴史もあった。

奄美諸島は琉球侵攻以降の数百年間、薩摩（鹿児島）に属していた。仏教、神道の布教など、薩摩（鹿児島）は奄美諸島の地域文化に大きな影響を与えた。一方、地理的な距離からみれば、奄美諸島は沖縄本島にもっと近い。自然景観も、大隅諸島やトカラ列島とは違って、沖縄本島北部とよく似ている。文化習俗もユタの存在、三線芸能など、琉球（沖縄）から受けた影響がみられる。

では、奄美諸島の石敢當はどのような特徴があるのか。その受容について、薩摩（鹿児島）、琉球（沖縄）および中国とは、どのような関わりを持つのか。本論文では、物と史料とを合わせて詳しく論じたい。調査地としては、喜界島、奄美大島や徳之島を選定した。調査期間は2019年8、9月である。

I 先行研究と調査地概要

(1) 奄美諸島の石敢當の先行研究

多くの先行研究資料は、奄美地方の石敢當伝来について言及している。窪徳忠は「石敢當造立の習俗は首里・那覇から本島の各地へ、それからさらに宮古や八重山などの先島方面に伝播したのだろう」と指摘している〔窪 1981：83〕。奄美地方では古い紀年の石敢當は未報告ながら、鹿児島県本土には元文4（1739）年造立のものがあり、そして、久米島には雍正11（1733）年造立の石敢當があるため、沖縄県地方から次第に北上していったという見当が有力さを増すように思われる〔窪 1998：452〕。『喜界島みてある記』〔喜界町教育委員会 1982〕、『喜界町誌』〔喜界町誌編纂委員会 2000〕、『志戸桶誌』〔志戸桶誌編纂委員会 1991〕、『喜界島風土記』〔拵 1990〕などの奄美地方誌や『石敢當の現状 宮崎編』〔松田 1986〕、『石敢當覚書』〔山里 2003〕、『民俗信仰 日本の石敢當』〔小玉 2004〕も窪と同じく、奄美諸島の石敢當は琉球（沖縄）から伝来したものだとして主張している。ほかには、「中国と日本の石敢當」〔周 1993〕、「關於泰山石敢當研究的幾個問題」〔葉 2017〕や「東亜視域下的琉球石敢當文化」〔劉 2018〕などの中国研究者の著作は、琉球→薩摩の石敢當伝播ルートを主張しているが、奄美諸島の石敢當受容については論じていない。

その一方、下野敏見は奄美諸島の北部に石敢當が多く、沖永良部島・与論島に少ない分布状況に疑問を持ち、奄美独自の九字紋がある石敢當と合わせて、奄美における伝播時期は薩摩藩支配後であろうと指摘している。琉球から伝来した石敢當は、修験道に通ずる武士を介し、トカラ列島を経て喜界島や徳之島まで伝播したと思われる〔下野 1989：509 - 510〕。高橋誠一は下野と同じ観点を持つほか、琉球から薩摩への伝播としては、首里・那覇から直接的に鹿児島に伝わったと考えている。その後、石敢當は逆方向に奄美諸島に広がっていった事実を強調している〔高橋 2008：175〕。

前述のように、先代研究者は歴史視点と石敢當の地域分布状況から、各自の奄美諸島の石敢當伝来論をまとめたが、どちらが正しいかは判断できない。そのため、筆者は石敢當の実物から、別ルートで奄美諸島の石敢當伝来と受容の状況をまとめたい。

(2) 調査地概要

具体的な調査地は喜界島、奄美大島や徳之島である（図1）。喜界島は奄美諸島の北東部にあり、面積が56.93km²である。隆起性サンゴ礁の島で、全島はほとんどサンゴを起源とする石灰岩で出来ている。喜界島を調査地に選定したのは、奄美大島、徳之島、沖永良部島や加計呂麻島より面積は小さいものの、島内にある石敢當の数が最も多いからである。奄美大島の面積は712.48km²であり、奄美諸島にある最も大きな島である。奄美大島には奄美市、龍郷町、大和村、宇検村や瀬戸内町の5市町村がある。奄美市にはまた住用村、笠利町や名瀬市がある。今回の調査地は、喜界島に最も近い奄美市笠利町や龍郷町を選定している。徳之島の面積は247.77km²であり、奄美諸島にある2番目に大きな島である。徳之島は、奄美諸島では最大の耕地面積を有している。島内には徳之島町、伊仙町や天城町の3町がある。日本国内合計特殊出生率の高さの第1位から第3位を占めているのは、徳之島の3町である。地理的にみると、喜界島や奄美大島は薩摩のトカラ列島に近く、徳之島は比較的沖縄本島北部に近い。

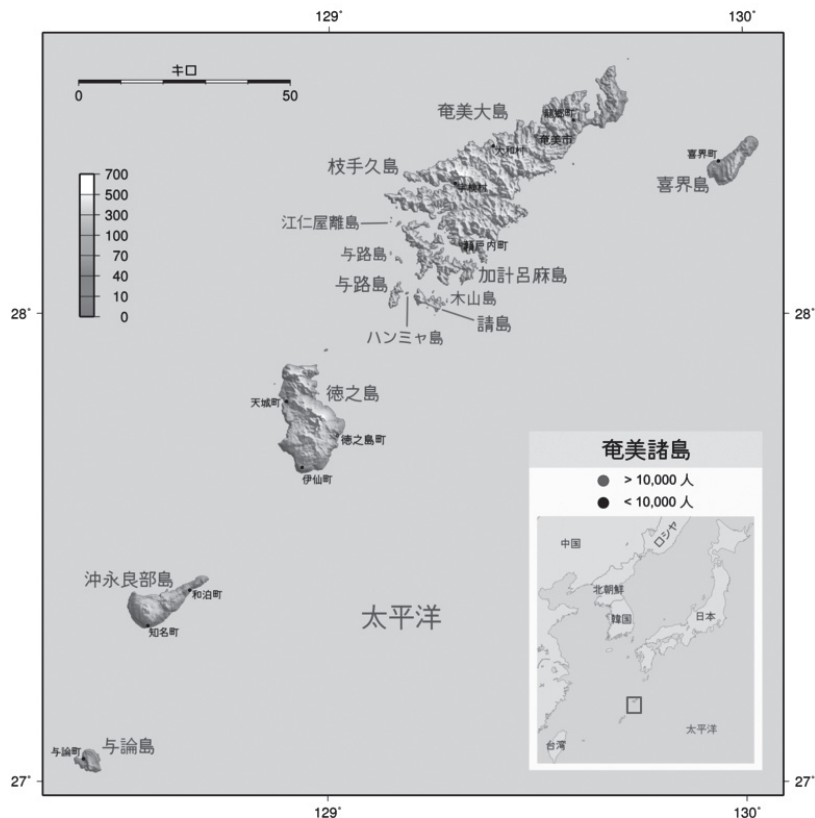


図1 奄美諸島図
(https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/b/be/Amami_Islands-ja.png)

Ⅱ 物からみる奄美諸島の石敢當現状

窪徳忠、下野敏見、小玉正任や高橋誠一などは各自の著作に、奄美諸島の各町にある石敢當の数および各島にある石敢當の密度などをまとめている。それを踏まえて、筆者は数多くの石敢當を見つけることができた。全て説明することは及びがたいので、各類型の石敢當を取り出して紹介したい。

筆者が最初に調査したのは、喜界島である。なぜなら、喜界島には最も多くの石敢當があるからである。そして、奄美大島から喜界島や徳之島行きの飛行機直行便がある一方、喜界島⇄徳之島の直行便がない。経済的な要素を考え、2番目に奄美大島、最後に徳之島を調査した。これからは筆者の調査の順番（北から南）によって、喜界島、奄美大島や徳之島で見つけた石敢當を説明する。

(1) 喜界島の石敢當

喜界島には荒木、中里、湾、赤連、中間、坂嶺、伊砂、伊実久、小野津、志戸桶、佐手久、塩道、早町、白水、嘉鈍、阿伝、蒲原、蒲生、花良治、先山、上嘉鉄、手久津久、川嶺、山田、羽里、城久、滝川、池治、先内、島中、西目や大朝戸など多くの集落がある。島民たちのご協力をいただき、筆者は島内にある数十基の石敢當を見つけることができた。これからは、その代表的な物を取り出して説明する。

喜界空港に着いたのは、午後3時頃であった。宿泊先に荷物を置いて、遠い所にも行けないため、その周りを歩いて見た。意外にも、すぐに1基の加工用石材の石敢當を見つけることができた（写真1）。石敢當は表札型の薄板で、コンクリートブロックに貼ってある。石碑のサイズは縦幅30cm・横

幅 15cmほどである。石碑がある人家の扉をノックすると、家主の中澤さん（66 歳、中里集落島民）が出てきて、インタビューを受けてくれた。彼の話では、「小さい頃から、島の中には石敢當が多かった。石敢當は悪いものが家に入らないように設置する物と昔から知っていた。向こうには喜界徳洲会病院があるでしょう。そこからここまで、昔は道があった。この石碑は 5、6 年前に庭をつくる際、石材屋から購入し設置した物だ」。

そして、彼は「このすぐ近くに、一つの古い石敢當があるよ。連れて行こうか」と言って、次の石敢當がある所に導いてくれた。彼の後ろについて、ある曲がり角を通ったら、1 基の古い石敢當が目に入った（写真 2）。石碑は大きな丁字路の突き当たりにある家の壁に嵌め込まれている。中澤家の石敢當と異なって、この石碑の材質はサンゴセメント、つまり石灰岩である。そのサイズは大きく、縦幅 80cm・横幅 30cmほどである。中澤さんが島の方言を使って何度も声を掛けると、返事が聞こえた。家から出てきたのは、かなり高齢の女性であった。確認すると、彼女の姓は寿である。今年 90 歳で、一人暮らしをしている。彼女の説明によると、22 歳で湾集落から嫁に来た時、既にこの石敢當があったという。ただし、具体的にはいつ頃につくられたかは知らない。昔、この近くに数基の古い石敢當があったが、開発の途中でなくなったという。聞き取り調査の際、彼女は家から冷たい栄養ドリンクを出しきて筆者にくれた。そして、通りがかりに偶然出会った男性からも、冷たい缶ビールをもらった。喜界島の島民は筆者の頭に、非常に良い印象を残した。寿家の後ろにある人家にも、1 基の石敢當がある（写真 3）。中澤家と同じく、石碑の材質は加工用石材であった。ただし、サイズが少し小さく、色ももっと黒い。寿家を真似て設置した物だという。

資料収集のため、喜界町中央公民館内にある喜界町歴史民俗資料館を訪問した。資料館のスタッフから、館内に石敢當の実物があると教えてもらった。石碑は二階の民具展示室に置いてある（写真 4）。その下部は長方形で、上部は楕形である。材質は石灰岩で、サイズは縦幅 50cm・横幅 25cm・奥行き 15cmほどである。石碑の詳しい情報は、スタッフにも分からないという。道路整備の際、サンゴの石垣が破壊された人家から寄付された物らしい。腐食のせいで、石碑には幾つかの大きな穴ができています。古い石敢當に違いない。石碑の隣に解説板があり、その上に石敢當の写真が 1 枚掲載してある。ただし、解説板の石敢當と隣の石碑とは違う物である。解説板の石敢當には「石敢當」の文字の下に、九字紋が刻まれている。一方、隣の石敢當石碑には、九字紋がなかった。

その後、喜界町埋蔵文化財センターも訪ねた。センタースタッフである松原さん（46 歳）と話ができ、今回の調査経由を説明した。そして、彼が車を出し、筆者を連れて、彼が知っている数多くの石敢當を見に行ってくれた。川嶺、大朝戸、湾、山田や城久などの集落では、石灰岩の石敢當と加工用石材でできた石敢當を何基も見したが、最も引かれたのは城久集落の田中家にある石敢當である（写真 5）。写真の通り、石碑の下部はコンクリート製の台座で固定されている。その台座は色と材質が石碑と全く異なるため、新しくつくられた物に違いない。石碑には「石敢當」と刻まれ、「當」の半分が台座に埋まっている。台座の外に出ている部分のサイズは、縦幅 50cm・横幅 30cmほどである。「石碑の色は前に見つけた石敢當と全く違うため、その材質も違うのではないか」と質問すると、プロの松原さんが確認してくれた。結果として、この石敢當の材質は凝灰岩であった。凝灰岩は喜界島にはないため、この石敢當は外部から持ってきた物に違いない。彼の判断では、その石は恐らく山川石とのことである。

阿伝集落は喜界島の南東部に位置する。他の集落と比べ、阿伝集落には今でも昔ながらのサンゴの石垣が多く残っている。その中を歩いてみると、古い石垣に囲まれる石敢當がよく見られる。高橋誠一の調査によると、2008年の阿伝集落には17基の石敢當があった〔高橋 2008：172〕。ただし、彼の論文には分布図だけがあり、実物の写真を載せていなかった。筆者は石垣道の曲がり角の所に、1基の石敢當を見つけることができた（写真6）。写真の通り、石碑は石垣に囲まれている。その形は不規則な長方形で、サイズは縦幅30cm・横幅20cmほどである。サンゴ石は横向きに積み重なっているが、石敢當は縦置きである。石碑の色は周りのサンゴ石とは異なり、外部から持って来られた物であると推測される。阿伝集落には古い石敢當が多く、新しい物は滅多にない。その中には、材質がサンゴセメントでできている石敢當もあった。



写真1 中里集落▲中澤家の石敢當
(筆者撮影)



写真2 中里集落▲寿家の石敢當
(筆者撮影)



写真3 中里集落▲寿家裏の家にある石敢當 (筆者撮影)



写真4 喜界町歴史民俗資料館の石敢當
(筆者撮影)



写真5 城久集落▲田中家の石敢當
(筆者撮影)

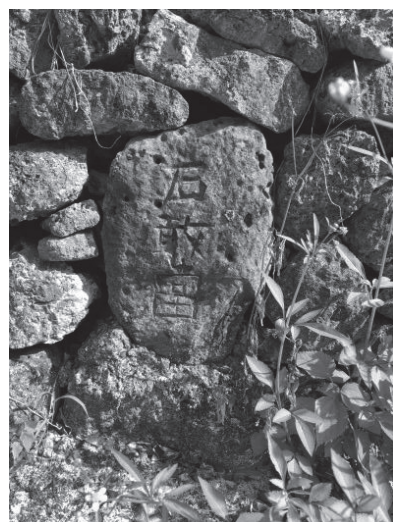


写真6 阿伝集落の石垣にある石敢當
(筆者撮影)

他地域では全く見られず九字紋がある石敢當は、奄美地方の一つの大きな特徴である。九字は縦4本・横5本の線から成る符号で、この紋字は禍いを避けられるという道教信仰に由来するものだが、日本では特に密教に取り入れられた〔小玉 2004：163〕。筆者は特に注意して探し出した結果、島

中集落にある東一美さん（88歳）の家に、こういう石敢當を見つけることができた。そして、1基のみならず、その家には4基もあった（写真7～10）！4基のサイズは大体同じく、縦幅50cm・横幅20cmほどである。詳しく聞くと、4基とも東一美さんの父親（故人）がつくった物であることが分かった。古い1基は明治後期に設置され、残りの3基は昭和前期に新しくつくられた物である。その父親がどういう経由で九字紋を知ったかと聞くと、「分からない」と答えた。知っているのは、彼が当時の神道関係者であったということだけであった。

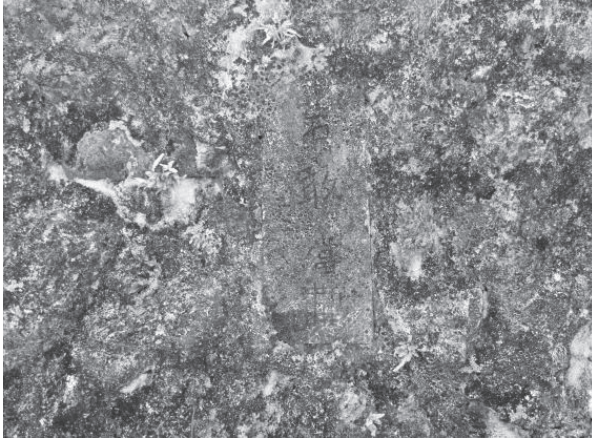


写真7 島中集落▲東一美家の石敢當①（筆者撮影）



写真8 東一美家の石敢當②（筆者撮影）



写真9 東一美家の石敢當③（筆者撮影）



写真10 東一美家の石敢當④（筆者撮影）



写真11 湾集落▲喜界教会対面の石敢當（筆者撮影）



写真12 湾集落▲幸一美家の石敢當（筆者撮影）

湾集落喜界教会の対面にある家の突きあたりに、1基の石敢當があった（写真 11）。石碑は加工用石材でできた石板である。その様子は新しくみえ、家ができた後に壁に貼って置く物だと考える。石碑のサイズは大きく、縦幅 80cm・横幅 30cmほどである。石碑の中央には、「石敢當」と刻まれている。刻字の上には、何かの動物の頭のような図形が描かれている。家には誰も住んでいない状態であったため、具体的な情報は得られなかった。周りの住民に確認すると、家主は 80 歳ぐらいの男性で、十数年前に鹿児島県本土へ引っ越した。彼は元々喜界小学校の教師であったが、退職後出家したという。

湾集落の幸一美さん（73）の家で、「朋石敢動」の刻字がある特別な石敢當を見つけることができた（写真 12）。石碑は家の突きあたりにある壁の外に立っている。四角柱の形で、サイズは縦幅 80cm・横幅 10cm・奥行き 10cmほどである。家主である幸一美さんと会うことができ、家の後ろの庭にも同じ物が 1 基あると教えてくれた。ただし、この石碑の半分以上は土地に埋まっている。2 基とも、25 年くらい前に亡くなった父親が昭和時代につくった物である。父親は当時、湾集落の神社に神職として務めていたという。幸一美さんはこれが魔除けのために設置した物だと分かっている。そして、周りの物はその刻字が「石敢當」で、自分の家にあった物とは異なっていることにも気づいていた。ただし、彼の父親がどういう経緯で「朋石敢動」にしたかについては正直なところ分からない。

（2）奄美大島の石敢當

①笠利町

笠利町は奄美大島の最北東端に位置し、大島紬の名産地として知られている。天気が良ければ、ここから喜界島が見える。町内には宇宿、笠利、里、外金久、中金久、節田、万屋、用、和野、川上、喜瀬、佐仁、須野、平、手花部、辺留、屋仁や用安などの 18 大字がある。最初に笠利町大字須野にある奄美市歴史民俗資料館を訪問したが、その中には石敢當がなかった。町内の石敢當現状をスタッフに聞くと、「ほとんどない」と答えた。実際に探してみると、その通りであった。小玉の調査データを参考にすると、笠利町には 5 基の石敢當があり、そのうち 4 基は「石敢當」、1 基は「石散當」であった〔小玉 2004：165〕。一方、高橋は笠利町に合計 15 基の石敢當があると指摘している〔高橋 2008：168〕。笠利町の面積は 60.23km²であり、喜界島よりやや大きい。比較してみれば、両地区の石敢當現状には大きな差があると感じられる。

笠利町の宿泊先に置いてある町歩き観光ガイドブックには、石敢當の記述が出ている。大字笠利の里前集落には、1 基の石敢當があると提示している。その下に「石敢當は直進する魔物が丁字路や三叉路などで突き当たりの家屋に侵入するのを防ぐため、その突きあたりに置いて魔物をぶつけて消し去るためのものとされている」と説明している。石敢當の位置が表示されているマップに沿って里前集落内を探したが、印がある所付近には見つからなかった。村民の協力で、見つけることができた（写真 13）。この石敢當は大笠利文化センター（旧里前公民館）近くの人家にあった。その材質はサンゴ石かコンクリートか確実には判明できないが、石灰岩と成分が同じである。石碑の下部が欠失しており、「石敢」の二文字だけが残っている。石碑がある家には、誰も住んでいなかった。里前集落に住んでいる 80 歳ぐらいの女性（名前は不明）から「この物は昔からありました。道路整備や水道作業の時に壊れてしまいました。普段はあまり気づきませんでした。何なのかな」と話した。その近くに焼肉パーティーの準備をしている人々にも聞いてみたが、誰も石敢當を知らなかった。その後、引き

続きその近くを回ってみたが、ほかに石敢當はなかった。

そのガイドブックの和野集落の部分にも、石敢當が出ている。その下に「石敢當は中国の影響を受け、琉球から伝わったとされる。百鬼を鎮め、災を圧するという石敢當は和野アガリの丁字路にもある」と説明している。マップに表示されている石敢當の印は、和野公民館のすぐ近くにある。探してみると、すぐにその石碑を見つけることができた（写真 14）。石碑は和野公民館前を通る道路の曲がり角にある電柱の傍らにある。石碑は山の形にしており、その頂部には 2 つの凹みがある。しかし、石碑には何の文字もなかった。果たしてこの石碑は石敢當といえるのかと筆者は考えている。その近くにある幾つかの人家に声を掛けたが、返事はなかった。引き続きその周りを回ってみたが、石敢當を見つけることはできなかった。

笠利町にあるほかの幾つかの集落も探したが、大字須野の崎原集落に唯一の石敢當を見つけることができた（写真 15）。石敢當がある家は、島バス崎原バス停のすぐ後ろにある。石敢當は長方形のコンクリート製の薄板で、サイズは小さく、縦幅 20cm・横幅 5cm ほどである。薄板は壁に貼ってあるが、その上部はまた釘が打ち込まれて固定してある。刻字の跡が薄く、最初の三文字は「石敢燈」と辛うじて読める。後ろの文字は「鬼」の部分があり、その上は「麻」の字で、「魔除け」ではないかと想像している。その家に何度も声を掛けたが、返事はなかった。外に出ると、崎原バス停でバスを待っている年配の女性に会った。彼女は「その家には 82 歳の女性と、彼女の弟の二人が住んでいます（プライバシー情報があるため、具体的な名前を公表しない）。女性の方は歩けません。二人ともよくバスで病院に通っているので、よく会います」と話した。彼女に頼んでもう一度声を掛けてもらったら、弟の方が出てきた。しかし、筆者から質問すると、彼は「ええー、聞こえない。うちはそうじゃないから！」と断った。先ほどの女性に「石敢當を知っていますか」と聞いたが、彼女は何も分からなかった。

②龍郷町

龍郷町は奄美大島の北部に位置しており、笠利町と接している。町内には秋名・幾里、嘉渡、円、安木屋場、久場、瀬留・玉里、屋入、蒲、大勝、川内、中勝、戸口、手広、赤尾木や芦徳など多くの集落がある。小玉の調査データによると、龍郷町には 8 基の「石敢當」、3 基の「石散當」、1 基の「石散塔」や 1 基の「石散」、総計 13 基の石敢當があった [小玉 2004:165]。高橋は『龍郷町誌 民俗』や久永元利の『石敢當探訪 第二集』にある石敢當のデータを参照し、彼の調査結果を加えて、龍郷町に現存・既に消失してしまった石敢當の数は 31 基であったと結論づけている [高橋 2012:275]。龍郷町の面積は 81.82km²で、喜界島より遥かに大きい。しかし、筆者が喜界島でわずか 4 日で見つけた石敢當の数は 31 基をこえた。一方、同じ程度の時間で、龍郷町では 3 基の石敢當しか見つからなかった。

「りゅうがく館」は龍郷町中央公民館跡地（同町浦集落にある）に建設された文化財展示室、図書館、公民館、防災の機能を兼ね備えた複合型施設である。現地を調査する前に、筆者はまずそこへ石敢當の資料を調べに行った。問い合わせの窓口で石敢當について聞くと、スタッフの重田美咲さんから、彼女が撮った嘉渡集落にある石敢當の写真を提供してもらった（写真 16）。高橋の著作にも、この石碑が取り上げられている [高橋 2012:250]。石碑は新しくつくられた物であって、元々は丁字路

の突き当たりにあった無刻字の自然石であった。大正ないし昭和初期に、集落の物知りによってつくられた物であったとされる。戦後から日本が高度経済成長期に入り、その時期に多く行われていた道路整備活動に伴って石敢當は取り払われた。後に前田金次郎という人物によって、元の場所にこの石碑が建立されたという。今の石碑は楕円形で、サイズは大きく、高さが80cmほどある。石碑の中央に「石敢當」、その下に「除災」「招福」と刻まれている。

「りゅうがく館」を出てその周辺を歩いてみると、大勝集落に1基の石敢當を見つけることができた（写真17）。大勝集落にある橋を通ると、すぐに道路の方向が変わった。石敢當は道の曲がり角の押村家にある。石碑は表札型で、サイズは縦幅20cm・横幅10cmほどである。押村家の玄関ドアをノックすると、70歳ぐらいの女性が出てきてインタビューを受けてくれた。彼女は石敢當を全く知らなかったが、この石碑は5、6年前に庭をつくった際、建設会社彼女の主人の友人の勧めで設置した物だと話した。

大勝集落から随分と時間がかかって、赤尾木集落に次の石敢當を見つけることができた（写真18）。石碑は沿岸道路から、鹿児島県立大島養護学校へ行く丁字路の突き当たりであった。大きさは大勝集落の石敢當と大体同じであるが、刻字は「石敢當」ではなく、「石巖當」であった。石碑はセメントに囲まれて、壁に貼って置いてある。石碑とそれを囲むセメントが緑色に染められ、「石巖當」の文字だけが白色に染められている。石碑がある家には、誰もいなかった。恐らく目立つように、特に夜に往来する車両の注意喚起のためにそうしたのではないかと推測される。



写真13 笠利集落の石敢當（筆者撮影）



写真14 和野集落の石碑（筆者撮影）

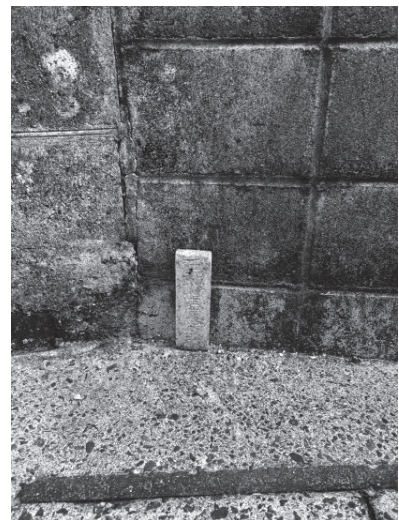


写真15 崎原集落▲崎原バス停の石敢當（筆者撮影）



写真 16 嘉渡集落の石敢當
(重田美咲さん提供)



写真 17 大勝集落▲押村家の石敢當
(筆者撮影)



写真 18 赤尾木集落の「石敢當」
(筆者撮影)

(3) 徳之島の石敢當

小玉の調査データでは、2004 年の徳之島町には 12 基、天城町には 6 基、伊仙町には 63 基の石敢當があった [小玉 2004 : 166]。一方、高橋が 2008 年に行った調査の結果、徳之島には 19 基、天城町には 7 基、伊仙町には 75 基の石敢當があった [高橋 2008 : 166]。二人がまとめた各町の石敢當の数はそれぞれ異なっているが、伊仙町の石敢當が最も多く、天城町の石敢當が最も少ない状況は一致している。筆者は伊仙町と天城町で、石敢當調査を行った。

①伊仙町

伊仙町の面積は 62.7km²である。その中には糸木名、崎原、犬田布、木之香、阿権、阿三、伊仙、検福、面縄、喜念、小島、佐弁、中山、馬根、古里、目手久や八重竿など多くの集落がある。小玉の記録によると、伊仙町立歴史民俗資料館には九字紋があり、刻字が「石眼當」の石敢當が所蔵されている [小玉 2004 : 166]。しかし、実際に資料館に行って尋ねた結果、そこには石敢當がなかった。伊仙町教育委員会歴史民俗資料館主事補である與嶺友紀也さんから、十数年前の資料館は別の所にあったと教えてもらった。職員さんが車を出して、旧資料館に連れていってくれたが、そこにも前述の石敢當はなかった。

資料館から出ると、そのすぐ近くに 1 基の石敢當を見つけることができた (写真 19)。石碑はコンクリート製で、道路の曲がり角にある。形は不規則な長方形で、サイズは縦幅 25cm・横幅 15cm ほどである。具体的な情報を、当時家にいた福島さん (女性、80 代) に聞いた。彼女は「主人は何十年か前に伊仙集落の物知りから情報を得て、自分で家につくって置いた」と話した。彼女にその方の家に連れて行ってもらったが、不在であった。

面縄集落では、多くの石敢當を見つけることができた。その中には、九字紋がある石敢當が 2 基あった。2 基とも長い曲道にあり、石碑がある二つの家も同じく富岡家であった。1 基は曲がり角にある壁に嵌め込まれている (写真 20)。形は長方形で、サイズは縦幅 40cm・横幅 20cm ほどである。石碑には「石散當」と縦書き、「石」文字の横には九字紋がある。コンクリート製のように見えるが、はっ

きりと言いきれない。石敢當の色は壁より暗く見え、壁が完成した後にできた感じがする。詳しい情報を、石碑がある家に住んでいる 80 歳ぐらいの女性に聞いてみたが、何も分からなかった。主人がつくったと話したが、その方は数年前に亡くなった。彼女の主人は学校の先生であったとも教えてくれた。先生の書斎がそのまま残っている。書斎の扉が開いていたため、庭から膨大な量の書類が見える。ただし、中に入る許可はもらえなかった。



写真 19 伊仙集落▲福島家の石敢當
(筆者撮影)



写真 20 面縄集落▲富岡（元教師）
家の石敢當（筆者撮影）



写真 21 面縄集落▲富岡家の石敢當
(筆者撮影)

もう 1 基は曲がり角にある、富岡家の石垣の外に立っている（写真 21）。石敢當はコンクリート製で、それほど古くないように見える。形は長方体で、サイズは縦幅 40cm・横幅 20cm・奥行き 8cm ほどである。石碑の中央に「散石當」と縦書き、「當」の文字の横には九字紋がある。石敢當がある家には、当時 92 歳の女性とその子供がいた。残念ながら、女性は認知症のため、何も分からなかった。その子供も石敢當については何も知らなかった。

面縄集落の出入り口の所に、1 基の石敢當を見つけることができた（写真 22）。石碑は三叉路の突き当たりにある人家の石垣の外にある。石碑前の道を少し通りすぎると、奄美群島本土復帰運動指導者・詩人・教育者・元名瀬市長である泉芳朗（1905 - 1959）誕生の地になる。石碑の材質は石灰岩ではなく、凝灰岩であるらしい。形は長方体で、サイズは縦幅 40cm・横幅 20cm・奥行き 12cm ほどである。石碑には「散石當」と縦書き、その下部はコンクリート製の台座で固定されている。石碑の左下部に大きな欠けがあり、上部にも傷があって、「散」の字が辛うじて読める。古そうに見えるが、石碑がある家には雑草ばかりで、誰も住んでいなかったため、推測しかできない。

伊仙町面縄小学校隣の福井家には、1 基の特別な石敢當があった（写真 23）。石碑は三叉路の突き当たりにある家の後ろの壁に貼って置いてある。石碑の材質は加工用石材である。形は長方形で、サイズは縦幅 20cm・横幅 10cm ほどである。石碑は横向きに壁に貼られ、「石敢當」と書かれている。日本では「石敢當」の文字が横書きの物があまり見られない。これは筆者が日本で初めて見た物である。福井家は電線が切られ、中の木と石塔も倒れて、誰も住んでいない状態であった。面縄小学校にも聞きに行ったが、教務の方は「詳しい情報がなく、結構前から人が住んでいなかった」と教えてくれた。石碑の様態から、それほど古い物ではないと推測できる。



写真 22 面縄集落▲泉芳朗誕生の地近くの「散石當」(筆者撮影)



写真 23 面縄小学校隣の福井家にある石敢當(筆者撮影)



写真 24 面縄集落の空き地にある「散當」(筆者撮影)

鹿児島県大島郡伊仙町面縄 449 番地、住宅地の間に小さな空き地がある。空き地は田んぼになっているが、三叉路の突き当たり一面の壁が残っている。その壁の上部には、「散當」の文字が刻まれている(写真 24)。このように直接壁に文字を刻むケースも、日本では初めて見た。周りの住民に聞くと、「そこに住んでいた者はずいぶん前から別の所に引っ越した」という。

面縄に次いで、犬田布集落にも幾つかの石敢當を見つけることができた。犬田布集落の佳久家には、2 基の石敢當がある。1 基は三叉路の突き当たりにあるセメントの壁に凹みをつくり、その中にセメントで「石敢當」の文字を浮き立たせている(写真 25)。凹みのサイズは縦幅 30cm・横幅 10cm ほどである。もう 1 基は丁字路の突き当たりにある、正門の横の壁にある(写真 26)。石敢當の材質はセメントで、壁から出っ張っている。その表面に凹みができ、中には「石敢當」と書かれている。サイズは縦幅 36cm・横幅 12cm・奥行き 2cm ほどである。佳久氏は家にいなかったが、隣で家屋を建てている作業員の方たちから情報をもらった。二つの石敢當とも、20 年ほど前に壁をつくる際、木を使ってセメントを固定しつづけた物である。

伊仙町犬田布 173 番地周辺、犬田布から空港行きの幹線道路を曲がった所に、1 基の石敢當がある(写真 27)。石敢當の形は角柱状で、サイズは縦幅 50cm・横幅 15cm・奥行き 12cm ほどである。材質はコンクリート製で、その正面には「石当散」の文字が刻まれ、「当」の文字の所は折れている。石敢當がある家屋には、誰も住んでいなかった。刻字が「石当散」の石敢當は、糸木名集落にも 2 基ある。1 基は星野弘臣氏の家にある(写真 28)。石敢當はコンクリート製で、丁字路の突き当たりにある。長方形の板で、サイズは縦幅 26cm・横幅 8cm ほどである。車両がぶつかってこないように、昭和 62 年につくったという。もう 1 基は伊仙町糸木名 905 番地周辺にある、表札がない家にある物である(写真 29)。その家には誰もいなかったため、名前が確認できなかった。石碑は加工用石材の材質で、形は鹿児島県本土でよく見られる将棋の駒形である。サイズは縦幅 50cm・横幅 30cm ほどであり、門の前の壁に斜めに置いてある。石碑の様子は、かなり新しく見える。



写真 25 大田布集落▲佳久家の石敢當①
(筆者撮影)



写真 26 佳久家の石敢當② (筆者撮影)



写真 27 大田布集落にある「石敢當」
(筆者撮影)



写真 28 糸木名集落▲星野家の「石敢當」
(筆者撮影)



写真 29 糸木名集落にある将棋型
「石敢當」(筆者撮影)



写真 30 喜念集落▲元田家にある石敢當
(筆者撮影)

高橋が2008年に出した成果論文に、喜念、小島、佐弁、中山、馬根、古里、目手久、八重竿などの集落には、石敢當が設置されていないとある[高橋 2008:166]。筆者は伊仙町にある喜念集落の一部を歩いてみた結果として、2基の石敢當を見つけることができた。二つとも、「石敢當」の刻字がある物である。1基は道の曲がり角にある元田家にあった(写真30)。石碑の材質は加工用石材であり、壁の下部に貼られている。形は長方形で、サイズは縦幅20cm・横幅10cmほどである。元田家入り口両側の塀の上には、各々立派な陶製のシーサー(獅子)が置かれている。調査の時に家にいたのは、小さな赤ちゃんとその母親であった。彼女の説明では、「主人が仕事の関係で、よく沖縄に通っている。入り口のシーサーや石敢當は、全て数年前に沖縄から取り寄せた物である」とのことである。もう1基は同集落の元山家にあった(写真31)。自動販売機が置いてある島バス喜念バス停の側には、一つの細道がある。その道は元山家の前で、方向が変わっている。その曲がり角に、1基の石敢當が設置されている。この石敢當も加工用石材の材質であり、壁の下部に貼られている。形は長方形で、サイズは元田家よりやや大きく、縦幅20cm・横幅15cmほどである。残念ながら、当時その家には誰もいなかったため、石碑の情報が確認できなかった。見た目では、比較的新しい物だと判断できる。

写真 31 喜念集落▲元山家にある石敢當
(筆者撮影)写真 32 浅間集落▲徳電舎看板下にある
石敢當 (筆者撮影)写真 33 浅間集落にある石敢當
(筆者撮影)

②天城町

天城町は徳之島の最北部に位置し、徳之島子宝空港はそこにある。面積は 80.35km²であり、町内には浅間、天城、松原、岡前、兼久、瀬滝、当部、大津川、西阿木名や与名間などの集落がある。伊仙天城線（県道 83 号）沿いの西阿木名郵便局や天城町立西阿木名小中学校を通過して、丁字路の突き当たりにある人家には、1 基の石敢當があった。石碑は表札型で、壁に貼られている。サイズは縦幅 20 cm・横幅 10cm ほどである。石碑には、「石散當」と書かれている。石碑がある人家には、当時誰もいなかったため、具体的な情報は入手できなかった。石碑の様態から、古い物ではないと判明できる。

徳之島子宝空港の隣は、浅間集落である。高橋の調査データによると、浅間集落では石敢當が見られない [高橋 2008 : 166]。筆者が周辺を歩いてみると、2 基の石敢當を見つけることができた。1 基は九州電力指定工事店徳電舎株式会社の看板がある所にあった (写真 32)。石敢當は白い加工用石材でできており、壁に沿って置いてある。形は正方体で、長さは 20cm ほどである。石碑には「石敢當」と書かれて、文字が赤色に染められている。看板が設置される家には、当時誰もいなかった。石碑の様態は、比較的新しく見える。もう 1 基は天城町浅間 805 番地の突き当たりにある人家にあった (写真 33)。石敢當がある家には、表札がなかった。石碑は赤色の加工用石材でできており、壁に貼られている。表札型で、サイズは縦幅 20cm・横幅 10cm ほどである。石碑には「石敢當」と書かれて、文字が白色に染められている。この石敢當も、比較的新しく見える。

Ⅲ 奄美諸島の石敢當伝来論

(1) 奄美諸島の石敢當の薩摩伝来論の分析

前述のように、下野や高橋は奄美諸島における石敢當の数と密度から、薩摩伝来論を提唱している。筆者は高橋の調査データに自分の調査データを加えて、奄美諸島の各島にある石敢當の分布表をつくった (表 1)。

表示の通り、奄美諸島最北部の喜界島にある石敢當の数は圧倒的に多く、最南端の与論島・沖永良

部島にある石敢當の数は少ない。喜界島に最も近い奄美大島は、その面積が喜界島の10倍以上もある。しかし、そこにある石敢當の数は、喜界島より遥かに少ない。奄美諸島においても、計算すれば、奄美大島における石敢當の密度が最も低いことが分かる。奄美大島の笠利町や龍郷町は、喜界島に近い。天気の良い時は、喜界島の島姿が見える。しかし、笠利町や龍郷町においては、石敢當が普通に見られない状況である。一方、面積が小さな加計呂麻島・与路島・請島における石敢當の密度は、北にある奄美大島より高い。実は、喜界島や与路島を除くと、他の島の島内における石敢當分布も大きな地域差がある。加計呂麻島・沖永良部島・与論島にある石敢當は、少数の村に集中している。徳之島の場合、北部の天城町にある石敢當は島内で最少であり、石敢當の密度も最も低い。これに対して、南部の伊仙町には石敢當が多数あり、石敢當の密度も極端に高い。つまり、奄美諸島にある石敢當の数や密度は、北から南へと順次に減っていくのではないということである。

表1 奄美諸島の石敢當分布状況（高橋や筆者のデータより作成）

島	面積 (km ²)	石敢當の数 (基)	石敢當の分布状況
喜界島	56.93	280	全ての集落にあり、密度が奄美諸島で最も高い。
奄美大島	712.48	179	密度が最も低く、石敢當がない集落は多くある。
加計呂麻島	77.39	42	密度が奄美諸島で三番目に高いが、喜界島より遥かに低い。石敢當がない集落も多くある。
与路島	9.35	14	密度が奄美諸島で二番目に高い。
請島	13.34	6	密度が奄美諸島で四番目に高く、池地集落に5基、請阿室集落に1基と地域差がある。
徳之島	247.77	105	密度が奄美諸島で三番目に低い。そして、南北差が大きく、伊仙町には75基あり、その密度は与路島に近い。
沖永良部島	93.69	28	密度が奄美諸島で二番目に低い、半分以上の集落には石敢當がない。
与論島	20.58	9	密度が奄美諸島で五番目に高いが、8基は麦屋集落にあり、6集落中4集落には石敢當がない。

(2) 奄美諸島の石敢當の琉球伝来論の分析

喜界島町・笠利町・龍郷町の観光ガイドブックや奄美の民俗文化誌では、石敢當を中国から琉球経由で伝わってきた物と説明している。だが、その琉球伝来の根拠はどこにあるのかについては書かれていない。窪徳忠は「和泊町和泊では、琉球王国に行った奄美の役人が石敢當についての知識を持ち帰ってきたのではないかと述べられている。このことは、石敢當造立の習俗が沖縄県地方から伝えられたことを示唆しているのではないだろうか」と指摘している〔窪 2000: 362 - 363〕。小玉は『民俗信仰 日本の石敢當』の「鹿児島県」の節に、市町村単位で奄美諸島の石敢當現状を説明している〔小玉 2004: 162 - 167〕。筆者はそのデータをまとめ、各地にある石敢當の類型や基数の表を作成した（表2）。

表示の通り、面積が最も大きな奄美大島、二番目に大きな徳之島や石敢當の基数が最も多い喜界島には、石敢當にある刻字が多種ある。これに対して、他の島々には「石敢當」や「石散當」しかない。特に、沖縄本島北部に最も近い沖永良部島や与論島の2島には、「石敢當」だけがある。沖縄にあるのはほぼ「石敢當」であるため、奄美諸島最南端の沖永良部島や与論島の石敢當は、琉球から伝来し

た可能性が高いと考える。一方、「散」の字がある石敢當は、薩摩に形成した独自のスタイルであり、沖縄ではほぼ見られない。よって、「石散當」がある徳之島以北の島々には、必ず薩摩からの石敢當伝来があったと考えられる。

表2 奄美諸島各市町村にある石敢當（小玉のデータより作成）

市町村	石敢當の数（基）	種類と数
喜界島喜界町	182	137 基は「石敢當」、11 基は「石敢当」、16 基は「石散當」、7 基は「石散当」、2 基は「石巖當」、1 基は「石敢堂」、1 基は「石散堂」、1 基は「朋石散動」、6 基は「當」である。
奄美大島各市町村（瀬戸内町除外）	65	笠利町には総計 5 基、4 基は「石敢當」、1 基は「石散當」である。龍郷町には総計 13 基、8 基は「石敢當」、3 基は「石散當」、1 基は「石散塔」、1 基は「石散」である。名瀬市には総計 29 基、24 基は「石敢當」、2 基は「石敢当」、2 基は「石散當」、1 基は「石散堂」である。住用村にある 2 基はいずれも「石敢當」である。大和村には総計 14 基、6 基は「石敢當」、2 基は「石敢当」、3 基は「石散當」、1 基は「石散道」、1 基は「石当散」、1 基は「石堂」である。宇検村には「石敢當」や「石散當」各 1 基がある。
瀬戸内町（加計呂麻島、与路島、請島を含む）	10	8 基は「石敢當」、2 基は「石散當」である。
徳之島 3 町	81	徳之島町には 12 基、1 基は「石敢當」、3 基は「石散當」、5 基は「石當散」、3 基は「石岩當散」である。天城町には 6 基、3 基は「石敢當」、3 基は「石散當」である。伊仙町には 63 基、8 基は「石敢當」、18 基は「石散當」、26 基は「石當散」、5 基は「散石當」、2 基は「當散」、1 基は「石散」、3 基は「石當」である。
沖永良部島 2 町	16	いずれも「石敢當」である。
与論島与論町	7	いずれも「石敢當」である。

（3）奄美諸島の石敢當伝来について

筆者は喜界島、奄美大島や徳之島では、数多くの石敢當を見つけることができた。その古い石敢當の中には、材質がサンゴ石である物が多く、外来材質製の物は少ない。新しくできた石敢當には、コンクリート製の物も多く有れば、材質が加工用石材である物も少なくない。今回の調査を通じて、現在の奄美諸島に残っている石敢當は、戦後にできた物が圧倒的に多いと実感した。このような奄美諸島の石敢當現状で、その石敢當伝来を分析するのは些か不合理だと考える。長い歴史にわたってできた石敢當を、古い物と新しい物に分けて、歴史とも照らし合わせてみるべきだと考える。そして、従来の研究は奄美諸島の石敢當伝来を琉球や薩摩に追求してきたが、それ以外の中国伝来の可能性は如何ばかりかと、それを研究する必要もあると考える。これからは物の分析を通じて、進めて論じたい。

IV 物の比較を通じてみる奄美諸島の石敢當受容

（1）古い石敢當の比較を通じてみる奄美諸島の石敢當受容

奄美諸島には、年号がある古い石敢當はなかった。聞き取り調査で確認できる最も古い石敢當は明

治後期、つまり琉球処分後に設置された物である。多くの古い石敢當は、その設置された時期がはっきりと断定できない。喜界町歴史民俗資料館にある古い石敢當（写真4）は、その材質がサンゴセメントである。筆者は沖縄本島北部の今帰仁村においても、幾つかのこのようなサンゴセメントでできた石敢當を見つけることができた。沖縄・奄美においては、サンゴ石が入手しやすい。ただし、サンゴ石の材質だけで、琉球からの影響を受けたとは判定できない。石碑の上部は楕形で、筆者は沖縄においても、幾つかのこのような形の古い石敢當を見つけることができた。どちらかという、この石碑の様態は琉球に近い。

喜界島の阿伝集落では、石垣が昔の風景をそのまま残している。写真6の石敢當は石垣の下部分に挟み込まれている。このような石碑は、首里城下町によく見られる（写真34）。写真6と写真34を比較してみれば、石垣はもちろん、刻字もともに「石敢當」で、石碑の材質も同じように見える。旧薩摩領の麓地域にも、石垣に設置される石敢當が見られる。しかし、その多くは違うスタイルを表している。写真35のように、石敢當は石垣の上に立てられ、屋頭の形（あるいは将棋の駒形）にされている。その刻字は「石敢當」より、「石散當」が多い。総じてみれば、阿伝集落にある古い石敢當の様態は琉球に近い。

「散」の字がある石敢當は、薩摩独自の物である。琉球王国時代にできた石敢當には、「石散當」がほぼないため、写真22の石碑は薩摩から伝来した物だと考えられる。この石碑の刻字は「石散當」ではなく、「散石當」であった。奄美の島民が薩摩に行った時に見た「石散當」を間違えて、「散石當」にしたのではないかと考える。

九字紋がある石敢當は、奄美諸島以外のどこにもない。だが、屋久島には、九字紋だけがある無文字の石碑がある。「九字」が日本本土の陰陽道や修験道に受容されたため、薩摩の布教運動中に伝来した可能性が高いと考える。東一美家の九字紋がある石敢當（写真7～10）の製作者も神社関係者であった。写真5の石敢當は材質が凝灰岩であるため、薩摩の山川から伝来した可能性が高いと考えられる。ただし、中国伝来の可能性はないともいえない。



写真34 首里金城町石畳道にある石敢當（筆者撮影）



写真35 志布志城下の麓にある石敢當（筆者撮影）

（2）近現代にできた石敢當の比較を通じてみる奄美諸島の石敢當受容

奄美諸島においては、「当」の字がある石敢當が多くある。昭和21（1946）年に、日本は漢字使用に大きな制限を加え、「當」→「当」、「藝」→「芸」のように新字体を採用した。「石当散」は、恐ら

くその後にできた物だと考える。ただし、最近にできた石敢當には、「當」の字がある物も多かった。写真 29 の屋頭型（あるいは将棋型）の石敢當は、同じ型の物が旧薩摩領でよく見られる（写真 36）。一方、その「石当散」の文字があまり見られない。その大部分は「石敢當」「石散當」である。現在の奄美諸島には、表札の形にした、材質が加工用石材である石敢當が最も多い。このような石敢當は現代の沖縄社会に非常に多く、旧薩摩領ではあまり見られない。



写真 36 隼人歴史民俗資料館にある薩摩風の将棋型の石敢當
(筆者撮影)

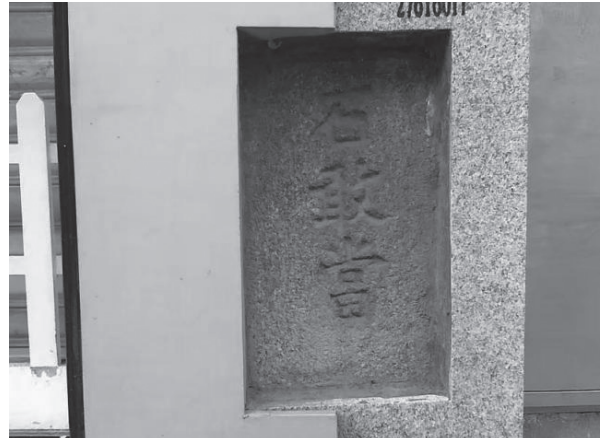


写真 37 中国福建省泉州市にある刻字が赤色に染められた石敢當
(蘇永志さん提供)

写真 32 の比較的新しい石敢當は、「石敢當」の刻字が赤色に染められている。このような石敢當は沖縄にも旧薩摩領にもないが、中国ではよく見られる（写真 37）。中国では文字を赤色にすると、辟邪の力が増やせるとされている。写真 12 の「朋石敢動」はほかの何処にもなく、新しくつくった可能性が高い。写真 11 の動物の頭のような図形のある石敢當は旧薩摩領にはないため、中国あるいは沖縄からの影響を受けたと考える。ほかには、書籍からその知識を得て、石敢當をつくった状況も考えられる。従来の石敢當研究資料では、ほとんど新字体の「当」を使用している。こうした知識をもって、石敢當をつくった場合は、「当」を使う可能性が高いと思われる。

(3) 各地域における石敢當分布の比較を通じてみる奄美諸島の石敢當受容

筆者は同じ程度の時間をかけて、喜界島、奄美大島や徳之島で調査を行った。島民のご協力のおかげで、多くの石敢當を見つけることができた。そして、調査で見つかった石敢當の数、種類、形および分布状況をまとめ、調査表を作成した（表 3）。この調査表のデータをみても、奄美大島に比べ、喜界島や徳之島における石敢當の普及率が高いことが分かる。両島にある石敢當の類型は複雑であり、島内の石敢當分布も異なっている。2 基の「朋石敢動」のほか、喜界島で見つけた石敢當は、意外にもその刻字が全て「石敢當」であった。高橋のデータを参照しても、喜界島の石敢當の刻字は「石敢當」の数が圧倒的に多く、「石散當」や「石散当」の割合が低いことが分かる。一方、徳之島には、「散」の字がある石敢當の数は「石敢當」をこえている。「散」の字がある石敢當は、旧薩摩領（鹿児島・宮崎南西部）からの影響を受けてできた物である。しかし、旧薩摩領（鹿児島・宮崎南西部）にもっと近い喜界島や奄美大島より、徳之島にある「散」の字がある石敢當の数は遥かに多い。

表 2 を参照すると、徳之島伊仙町にある石敢當の数は、島内にある石敢當総数の三分の二以上を占

めていることが分かる。しかし、さらに細かくみれば、伊仙町内の各集落にも、石敢當の分布状況が異なっていることが分かる。伊仙町歴史民俗資料館から、未公表の町内石敢當調査資料を入手した。その資料と自分のデータを参照すると、伊仙集落には「石敢當」1基、「石敢當」3基、「石當散」1基、合計5基の石敢當がある。犬田布集落には「石敢當」9基、「泰山石敢當」2基、「石散當」1基、合計12基の石敢當がある。犬田布集落の場合は、石敢當の写真も添付してある。9基の石敢當の中、2基は佳久家にある物である（写真25、写真26）。1基は写真23のような、「石敢當」と横書きしてある加工用石材の物である。残りの6基は、表札型の加工用石材の物である。こうみると、明らかに犬田布集落の石敢當受容には、琉球（沖縄）からの影響が大きい。一方、面縄集落に多くあるのは、「散」の字がある石敢當である。そして、犬田布集落の「石敢當」と比べると、面縄集落にある「散」の字がある石敢當は古い。面縄集落には、旧薩摩領（鹿児島・宮崎南西部）からの影響が強く感じられる。

表3 喜界島、奄美大島や徳之島の石敢當調査表（筆者作成）

調査地	見つけた石敢當の数（基）	材質状況	種類と数	備考
喜界島	32	外来石2基、サンゴ石8基、コンクリート2基、加工用石材20基がある。	「朋石敢動」2基、「石敢當」30基がある。	九字紋がある「石敢當」は4基、動物の頭のような図形が刻まれた「石敢當」は1基ある。
奄美大島	5	自然石1基、コンクリート2基、加工用石材2基がある。	無文字の石碑1基、「石敢當」3基、「石敢燈魔除け」1基がある。	無文字の石碑は石敢當かどうかの疑問がある。
徳之島	21	外来石1基、コンクリート8基、鏡の材質1基、プラスチック様な材質1基、加工用石材10基がある。	「石散當」2基、「散石當」2基、「散當」1基、「石当散」3基、「泰山石敢當」2基、「石敢當」11基がある。	九字紋がある「石敢當」は2基ある。屋頭型（あるいは将棋型）の「石当散」は1基ある。

小玉と筆者の調査データとを比べると、不一致な所も多くある。伊仙町を例に説明すると、筆者は町内で「石当散」を何基も見つけたが、小玉の調査データにはなかった。写真27の「石当散」がある犬田布集落と写真28、写真29の「石当散」がある糸木名集落は隣接している。こういう種類の石敢當受容は、地域関連性が感じられる。伊仙町歴史民俗資料館の調査資料には「石敢當」や「泰山石敢當」があったが、小玉の調査データにはなかった。そして、伊仙町には8基の「石敢當」があると小玉が指摘している。しかし、筆者は町内の犬田布集落だけでも、9基の「石敢當」を見つけることができた。このほか、伊仙町内の喜念集落にも、2基の「石敢當」（写真30、写真31）を見つけることができた。写真23の石敢當を含めて、面縄集落にも数基の「石敢當」を見つけることができた。いずれにせよ、伊仙町にある「石敢當」の数は、それほど少なくはない。

時間の関係で、奄美諸島南部の沖永良部島や与論島には行けなかった。小玉の調査データからみると、そこにあるのは全て「石敢當」であった。現在でも、その状況は大きな変化はないと考える。もともと両島は、沖縄本島に近い。特に沖縄本島北部の今帰仁村と沖永良部島とは、古くから交流があった。そして、2016年の世之主没後⁽¹⁾600年記念事業などを契機に、友好盟約都市締結の機運が高まっている。

V 歴史と合わせてみる奄美諸島の石敢當受容

(1) 琉球侵攻以前の奄美諸島における石敢當受容

琉球王国時代の前に喜界島をはじめ、奄美諸島はグスク時代に入った。その時期から奄美諸島と中国とは、既に多くの交流があった。喜界島埋蔵文化財センターでは、発掘された中国宋・元・明代の陶磁器残片や中国古代貨幣を見た。しかし、石敢當習俗が中国で大流行したのは、明代からのことである。奄美諸島の石敢當伝来は、それより早いとは考えられない。

その後、琉球は奄美諸島に攻めてきた。咸淳⁽²⁾2(1266)年に奄美大島が琉球の英祖王に進貢した記録が『中山世鑑』に残っている[羽地 1962: 27]。14世紀に、沖永良部島や与論島は北山の勢力圏に入り、1466年に喜界島は琉球王国の支配下に入った[長澤 1974: 47]。これで、奄美諸島は全て琉球王国の領土になった。1609年の薩摩侵攻によって、奄美諸島は薩摩領地になった。それまでの143年間の琉球統治時代を「那覇世(なはんゆ)」と呼ぶ。奄美諸島では王国の統治を受け、高倉、ズシガメ(厨子甕)などの多くの琉球習俗が受容され、ノロ制度も導入された。ヒンプンなどの中国⁽³⁾的な習俗も奄美諸島に受容された。同じく辟邪用の石敢當も、同時期に琉球から伝わってきた可能性があると考えられる。ただし、たとえ伝わってきたとしても、この時期の石敢當の受容度はかなり低かったと思われる。石敢當は近世琉球時代の風水展開が始まってから、琉球各地方へ普及していった。奄美諸島は首里・那覇から遠く離れた地方にあるため、その石敢當普及の影響が極めて有限であったと考えられる。

琉球王国のほか、石敢當がこの時期に中国から奄美諸島に伝わってきた可能性もないとはいえない。日本の戦国時代から、倭寇、密貿易、海商貿易、中国の戦乱などの影響を受け、数多くの唐人が西南諸島を含む南九州で活躍していた。これらの唐人を介して、石敢當が奄美に伝来した可能性も考えられる。ただし、それに関する史料はないため、推測の域を出ない。いずれにせよ、琉球侵攻前の時期に、石敢當が奄美諸島に伝来したとしても、ただの点から点への伝播であったと推測される。

(2) 近世琉球時期奄美諸島における石敢當受容

1609年の琉球侵攻により、琉球王国は実質的に薩摩の支配下に入った。そして、琉球王国と尚氏政権は残留し、奄美諸島だけが薩摩の領地になった。ただし、対外的には奄美諸島が琉球の一部とされていた。このような状態は、琉球処分による沖縄県の設置まで続いた。慶長18(1613)年から、薩摩は奄美各地に代官所や奉行所を設置し、政治管理を行っていた。この薩摩藩の統治時代を「大和世(やまとんゆ)」と呼ぶ。この時期の奄美諸島の島民は、琉球との接触を禁じられていた。しかし、こんな時期にも、奄美と琉球とは交流があった。

近世琉球時代の奄美諸島漂着の中国人と朝鮮人について、当初は長崎経由で護送していたが、その後、幕府の許可が通達され、薩摩は奄美諸島への漂着民を護送するようになった[平 1980: 106]。これを対応するために、奄美諸島に琉球王府の役人が派遣された。奄美諸島への中国船舶の漂着が多くなるにつれて、寛保3(1743)年に奄美に初めて唐通事制度が設けられた。10歳前後の少年が自費で薩摩の唐通事入門し、唐話稽古をすること7、8年で、帰島後は島役人としての唐通事になって、漂着中国人や朝鮮人の救恤、さらに沖縄本島へ護送する任務についた。薩摩は長崎の唐通事制度に倣っ

てきたため、その中国語は当然、江蘇・浙江地方の広義の南京語であった。そのため、奄美諸島の唐通事は薩摩で唐話稽古をしたのち、さらに琉球に渡って福建語、あるいは北京語を習うために那覇久米村の通事家⁽⁴⁾か、首里の国学で修練を重ねていた〔平 1980：110〕。

ほかには、製糖技術習得のために琉球に派遣された島民も多くあった。例えば、『和家文書』には、嘉和知という島民が黍の植え付けから砂糖製造法に至るまで、全ての技術を取得するために、琉球へ派遣された記録が残っている〔所崎 2005：22〕。つまり、近世琉球時代の奄美諸島は、薩摩や琉球との文化交流が頻繁に行われていた。薩摩藩の政治管理者、琉球王府の役人、薩摩や琉球に派遣された島民、さらに漂着で渡来した中国人などの影響で、石敢當が奄美諸島に伝わって広がっていったと考えられる。

(3) 琉球処分後の奄美諸島の石敢當受容

琉球処分によって、琉球王国は消滅し、日本領土の琉球藩になって、後に沖縄県になった。これと同時に、薩摩藩も廃藩置県によって、鹿児島県に変わった。1945 - 1952 年の米軍占領期を除くと、奄美諸島は鹿児島県に管理されていた。日本復帰以降、鹿児島本土や東京などの都市に移住する奄美諸島の島民の数が急増した。親族間の交流、あるいは老後に島に戻った人の影響で、薩摩風の新しい石敢當が多くできたと考えられる。

一方、奄美諸島に移住した琉球人も少なくない。喜界町図書館職員である藤崎誠之氏は、喜界島にある表札型の加工用石材の石敢當を生産する企業を調べてくれた。そして、比嘉建設株式会社と連絡を取ることができた。会社側の説明では、「当社はお墓をつくったり、石材を扱ったりもしている。その中で、石敢當もつくっている。初代社長は沖縄出身の 80 歳ぐらいの男性であり、現社長はその息子である。喜界島には、沖縄出身の方は結構いる」とのことであった。喜界島以外、追い込み漁で徳之島に移住してきた琉球人も存在する。沖縄から渡来した金城亀市(大正 12 年生まれ)の記憶では、徳之島に沖縄出身者が最も多くいた人数は、約 70 名程度だった〔石原 1985：47〕。沖永良部島や与論島は、沖縄本島にさらに近いと、琉球人の移動・移住がもっと頻繁であったと推測できる。両島にある石敢當が全て「石敢當」であったことは、琉球(沖縄)からの影響を受けた証しである。

徳之島の浅間集落には、刻字が赤色の中国風の石敢當が 1 基ある(写真 32)。石碑がある家の人に直接確認できなかったが、旧薩摩領や沖縄からの伝来は考えられない。犬田布集落にある 2 基の泰山石敢當のうち、1 基は「泰山石敢當」刻字の上に八卦がある。もう 1 基は「泰山石敢當」の刻字の上に八卦や獅子頭の画像がある。八卦がある泰山石敢當は旧薩摩領にも沖縄にもないため、中国(台湾を含む)から伝来した物だと考える。中国(台湾を含む)へ行ったことのある島民が、持ち帰って設置した状況も想像できる。奄美諸島は有名な観光地であり、沖縄-奄美の観光コースもある。現代社会は人の移動が便利になり、中国(台湾を含む)と奄美との交流も十分に考えられる。だが、やはり中国風の石敢當は少ない。

終わりに

奄美諸島においては、石敢當の伝来がずっと続いている。遡れば、石敢當は琉球侵攻以前の琉球、あるいは中国から、奄美に伝来した可能性がある。薩摩藩に支配されてから、薩摩の石敢當も奄美諸島の広範囲に伝わってきた。ただし、琉球からの影響はなかったとはいえない。奄美諸島南部の沖永良部島や与論島の石敢當は全て「石敢當」であるため、琉球（沖縄）から受けた影響が大きい。一方、それ以北の島々には、薩摩風や琉球風・現代沖縄風の石敢當が同時に存在する。そして、島々間、さらに島の各集落間の石敢當受容はそれぞれ異なっている。沖永良部島や与論島より、これらの島々が受けた地域伝播の影響はそれほど強くなかった。各島は独立した国のようであり、島々間や島内の石敢當受容には地域差異がみられる。

喜界島では、石敢當が昔から盛んだった。現在でも、その造立ブームが続き、奄美諸島のほかの島々とは全く異なる風景になっている。これは喜界島に特有の鬼文化や魔除け伝説などの信仰と関係があるだろう。喜界町図書館においては、喜界島独自の魔除けの資料が多く見られる。九字紋がある石敢當は、奄美諸島だけに見られる。奄美諸島が薩摩藩に支配されてから、修験道などの影響を多く受けた。奄美諸島の島民が「九字」を石敢當と融合させ、九字紋がある石敢當をつくったと推測される。

奄美諸島の民俗は鹿児島と比べ、沖縄により近い。現代では交通が便利になり、奄美諸島と沖縄との交流はさらに増えた。奄美諸島にある最近になってできた石敢當は、ほとんど加工用石材の物である。そして、屋頭型（あるいは将棋型）の石敢當より、表札型の「石敢當」の方が遥かに多い。沖縄からの影響が強く感じられる。中国風の石敢當も見つけることができたが、その数が少なく、奄美の石敢當普及に与える影響はほぼないと思う。

注

- (1) 世之主とは、那覇世時代の島を治めていた島主のことである。15世紀頃の沖永良部島の世之主は、琉球北山王次男の真松千代であった。
- (2) 咸淳とは、中国南宋時代の皇帝である宋度宗が、1265 - 1274年間の治世に使用した元号のことである。
- (3) ヒンプンとは、門と母屋の間に設ける塀のことであり、中国の屏風門に由来する。魔除けの役割を持ち、沖縄の古民家によく見られる。
- (4) 国学とは、1798年に尚温王の命によって創立された琉球王国の最高学府である。教授者は講義を担当する講談師匠・清の公用語である官話を担当する官話師匠・門閥子弟を主に担当する按司師匠に分かれ、いずれも官生として優秀な成績を修めた者から選ばれて、任期は3年とされていた。

参考文献

（日本語）

- 石原昌家 1985「徳之島在住沖縄出身者の生活史」沖縄国際大学南島文化研究所編『徳之島調査報告書3 一地域研究シリーズ8』文進印刷
- 喜界町教育委員会 1982『喜界島みてある記』あかつき印刷
- 喜界町誌編纂委員会 2000『喜界町誌』南日本新聞開発センター
- 窪徳忠 1981『南島文化叢書1 中国文化と南島』第一書房
- 1998「石敢當からみた中国・沖縄・奄美」『東アジアにおける宗教文化の伝来と受容』第一書房

- 2000「沖縄と奄美 ―石敢當を通して見た」『窪徳忠著作集 9 奄美のカマド神信仰』第一書房
- 拵嘉一郎 1990『神奈川大学日本常民文化叢書 1 喜界島風土記』平凡社
- 小玉正任 2004『民俗信仰 日本の石敢當』慶友社
- 志戸桶誌編集委員会 1991『志戸桶誌』鮮明堂印刷
- 下野敏見 1989「中国の石敢當とヤマト・琉球の石敢當」『ヤマト・琉球民俗の比較研究』法政大学出版局
- 2013『南日本の民俗文化誌 10 奄美諸島の民俗文化誌』南方新社
- 周星 1993「中国と日本の石敢當」佐野賢治編『比較民俗研究』第 7 号 比較民俗研究会
- 高橋誠一 2008「石敢當と文化交渉 ―奄美諸島を中心として」『東アジア文化交渉研究』創刊号 関西大学文化交渉学教育研究拠点
- 2012「奄美大島龍郷町の集落と石敢當」『関西大学東西学術研究所研究叢刊 42 日本と琉球の歴史景観と地理思想』関西大学出版部
- 所崎平 2005「糖業創始、慶長年間説への疑問」島尾敏雄編『奄美の文化 総合的研究』法政大学出版局
- 長澤和俊（編）1974『奄美文化誌 南島の歴史と民俗』西日本新聞社
- 羽地朝秀 1962『中山世鑑』伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編『琉球史料叢書第 5 巻』井上書房
- 平和彦 1980「近世奄美諸島漂着の中国人と朝鮮人の護送」南島史学会編『南島 ―その歴史と文化 3』第一書房
- 松田誠 1986『石敢當の現況 宮崎編』川内新生社
- 山里純一 2003「石敢當覚書」『日本東洋文化論集』第 9 巻 琉球大学法文学部

（中国語）

- 劉曉峰 2018「東亜視域下的琉球石敢當文化」『民俗研究』第 142 期 山東大学
- 葉涛 2017「關於泰山石敢當研究的幾個問題」『民俗研究』第 136 期 山東大学